大阪市における都市社会問題からみえる 1920 年代公園論の位相

A Study on Discourses in Park Theory in 1920s and Urban Social Problems in Osaka

永橋為介*

Tamesuke NAGAHASHI

摘要：1910 年代後半から 30 年代前半にかけての大阪では人口稠密化、煤煙問題、不況による失業者の増大などの都市社会問題が顕在化していた。本稿では社会状況を踏まえ、空間政策、社会政策の専門分野で展開された公園論に注目し、当時の公園が果たそうとした、もしくは果たさざるを得なかった意味と機能を構造的に捉える。当時の公園論は社会政策的な空間装置として公園を位置づけていながらも、大阪市社会部の公園論には、利用者像として「無宿者」の存在を想定し得ない言説構造が内在化されていた。しかし、当時の状況下においては、公園は社会構造から生じる「無宿者」のとりあえずの居場所としての機能を果たさざるを得なかった。

1. はじめに

1910 年代後半から 30 年代前半にかけての大阪は、1925 年国勢調査結果によれば人口 211 万 4804 人（面積 181.61km²）、東京市を抜いて全国第 1 位、世界第 6 位の人口を抱える大都市だった。また、東京市が市域を拡張する 1932 年まで全国一の工業生産額を誇る最大の工業都市でもあった。人口の集中・稠密化は旧市街地はもとより、新市域・郊外地においてより進んでいたといえる¹⁾。大阪市の人口稠密化は市街においては過密居住、郊外地においてはスプロール化などの問題を生じさせていた。工場集中による煤煙問題も激化していた²⁾。第一次大戦後のインフレ昂進のなか米騒動が発生し、その後の不況（反動恐慌、金融恐慌、昭和恐慌）により失業者の増大などの社会問題が激化していた。こうした中、公園・街路・橋下などの都市オープンスペースにおける「無宿者」も増加し、クローズアップされていた。

以上の都市社会問題の顕在化によって、行政レベルでの解決策の検討と実施は必須の課題となっていた。社会政策的な面では、米騒動発生を契機に方面委員制度が充足し、人口集中による住宅難や不況、それに伴う失業³⁾ に対しては、市営住宅、職業／労働紹介所、公設市場、市民館、公設質舗等の建設・開設、失業対策事業が展開された。空間政策の面では、1917 年、助役関一を委員長とする都市改良計画調査会が設置され、翌年、初めての都市計画担当部局となる市区改正部では、街路計画を骨子とする大阪市区改正設計を作成していた。この大阪市区改正設計は、東京市区改正条例を準用する形で 1919 年に内閣認可、翌年告示の運びとなった。大阪市区改正設計は都市計画法（1919 年公布、20 年 1 月施行）に引き継がれ、都市計画の審議機関として都市計画大阪地方委員会が設置され、市の都市計画部（旧市区改正部）、府の都市計画課がそれぞれ都市計画の執行に携わった。

当時の公園論や公園の在り方を考察することは、現代の大阪市域における野宿者と公園管理の問題を検討するための理論的基礎研究としても重要だと考える。社会構造から生み出される野宿者の存在を公園管理の問題としてのみ語るのとは不可能であり、社会福祉・雇用・住宅政策などの総合的な対応・取組みの中での検討こそが必要とされている。

本稿では、当時の社会状況と現代の野宿者と公園管理の問題の枠組認識とを踏まえて、空間政策、社会政策の専門分野で展開された公園論に注目し、公園が果たそうとした／果たさざるを得な

かった意味と機能を構造的に捉え考察を加える。先行研究としては、この時期の公園計画や公園論について考察した論稿はあるが、空間／社会政策との関わりから論じた研究はほとんどなく、野宿者との関係を検討した研究もない⁴⁾。この点に関して、公園史研究は公園の成立する社会構造の分析を捨象してきたという感を拭えない。公園史研究において野宿者問題を取り上げ考察するためには、社会構造を捉えなおす作業や社会政策の把握が不可欠となる。社会的文脈の上で公園論を検証し、その利用者像を浮かび上がらせて初めて野宿者の存在を対象化することができる。

2. 公園論の展開

本節では、1910 年代後半から 30 年代前半の社会状況の中で、大阪市高級助役から市長になり当時の都市政策・社会政策を進めた中心人物である関一、都市計画大阪地方委員会技師として府の公園計画に携わった大屋霊城、初代大阪市公園課課長の椎原兵市及び大原社会問題研究所で社会政策の研究を進めていた大林宗嗣によって展開された公園論・都市論を取りあげる。これらの公園論・都市論における公園像（公園の位置づけ・目的・機能）及び利用者像とその物理的実現方法を把握し、当時の社会状況との関係を明らかにする。

(1) 自由空地論：都市計画・郊外地規制からみた公園論

人口集中による市街地稠密化及び郊外地スプロール化に対し、都市オープンスペースの確保・計画的配置によって対応する計画論として、関は「自由空地」という空間概念を提唱する。関は自由空地を「建物に付随せざる空地であって、大小の公園、競技場、運動場、墓地、農耕地、樹林等の所謂緑色地帯」であり「我々の住居し得べき都市を建設する第一の条件は如何にして緑色地帯を保留し得る乎である。自由空地は建物なき残存物ではない。在っても無くてもよい猫の尻尾ではない」⁵⁾ とする。大阪市が広大な農村部を含めた西成郡、東成郡を市域に編入したのも、「都市に於ける人口の集積は若し之を個人の自由に放任して置く時は益々空地を減少せしめ、甚だしき場合には之を絶滅せしむる」⁶⁾ ことから、郊外地の開発を計画的に規制していくためであった。

関は自由空地の減少を指摘し「何等かの方法を以て空地の保留を強制する方法を採らなければ市民の身神の健全を保全することの出来ない運命に迫られている」⁷⁾ と主張する。その設定について、「保健、衛生等を立脚点とする公園、運動場、緑樹帯等の

*京都大学大学院農学研究科

施設」は市民の徹底的理解が得られず「必要を強調するに当たっても土地の用途地域に自我意識の極めて熾烈なるものがあるためにその現実的効果が比較的乏しい」⁸⁾と苦勞を語っている。ここには保健・衛生という観念とそれを物理的に体現するものとして要請された公園や運動場等も、当時の市民にとっては未だ広く認知されていない新しい空間として存在したことが窺える。では、この新しい物理的形態を軸とした空間概念は、どのような社会的機能及び利用形態・利用者像を想定したのであろうか。

(2) 公園の位置づけ

まずは、公園の利用形態についての認識を概観してみよう。

府立公園・都市計画公園の計画に携わった大屋壺城は、公園を「都市民唯一の清涼剤」に喩え、「公園は決して花見遊山の道具ではない。庭園は決して閑人のためにのみ必要な贅沢品ではない。都市に活動する者のすべてがこれを渴望し、これに依りて生きて居るのである」⁹⁾と主張した。

同様のことは大阪市公園課(1924年発足)の初代課長であった椎原兵市も述べている。椎原は公園を並木路、広場、川岸地等と共に「市民の健康を保全するために欠くべからざる市街の窓」と表現し、「自由空地」の恩恵により「空気を浄化し温熱の調節を得て健康を保持している」¹⁰⁾としてその機能・効果を述べ、さらに「単なる鑑賞よりも寧ろ健康を保持すべく必要な休養と慰安の為め、更に進んでは一般的な娯楽と教化、且は非常時の避難場所として実用化せられて来た」¹¹⁾と唱える。

また大原社会問題研究所で社会施策、特に社会事業の研究を進めていた大林宗嗣も、公園が「都市の美観を保つ為の装飾である」と考える時代は最早過ぎさり、現代では「公園は市民生活そのものに取って直接の必要」を認められているとし、「市民生活の衛生的教育的娯楽的目的の為」「土地そのものの合理的発展の為」に建設されるものであると主張する¹²⁾。そして近代都市の急激な人口集中と商工業の盛大によって「益々過群生活をなすに至り、市民は激烈なる競争から来る圧迫と過群生活から来る倦怠及び過勞との為に心身共に病的の状態に陥りつつある(中略)市民をかかえる状態から救う一つの都市社会政策とも云うべきものは市内公園の建設にある事は既に識者の唱道する所である」と述べ、都会における公園を「砂漠の泉池(オアシス)」¹³⁾と表現する。

さて、大屋、椎原、大林の展開した公園論の共通点として、公園が「オアシス/清涼剤/都市の窓・肺像」と表現され、「装飾・花見遊山の道具/鑑賞」という位置づけを否定し、衛生・保健・健康・教育・教化・休養・慰安・娯楽そして緊急時の避難に対応すべき機能を付加していることが挙げられる。では、このような機能を楽しむ利用者像とはどのようなものだったのか。

大林は「公園設立の目的は最大多数の民衆即ち労働者階級の為」¹⁴⁾と述べ、東京の芝、上野、浅草、日比谷等の大公園が市内にあり、日比谷以外の大公園小公園が何れも「貧民窟」にあることに触れ「大阪では浜寺、箕面、大浜、住吉等のごとく何れも郊外にあるのである。けれどもこれらの郊外公園は謂わば、中産階級以上のための公園たる趣を呈していて、労働者階級に利用せらるる事は甚だ稀である」¹⁵⁾と指摘する。大屋も、都市計画は「最も不潔な、最も貧困な、最も哀れむべき無産階級の市民が艱難として、働き住んで居る場末町が十分の光線を空気と水に恵まれて立派な軒を並べるように成って初めて」¹⁶⁾完成されると唱えた。

椎原も以下のように主張する。

民衆化、平等感が時代の風潮で公園の利用も単に一部ブルジョア階級や学生の散歩する處ではない。現代の都市公園は吾人に実生活にピッタリ合致した必要機関で一般民衆即ち貧富、貴賤、老若男女を問はず各人としての幸福を要求することに醒めて来た¹⁷⁾

公園が「中産階級以上/少数者/閑人/ブルジョア階級や学生」

のためではなく、「民衆/労働者階級/無産階級」のためであるという点で共通している。

「都市の中に公園を」との提言は、1923年の椎原が関わった桜宮公園の完成、昭和3年の大阪総合計画によって現実のものとなりつつあった。椎原兵市は大阪総合計画において「小公園は人口稠密地帯で取得が困難でも、不良住宅改良の意味を含むものはこれを推進する」¹⁸⁾と述べている。

公園の機能や形態、利用者像は時代状況と密接に関係している¹⁹⁾。大屋らの公園論に見られる「民衆/労働者階級/無産階級」という利用者像も、一般的な論としてではなく、当時の実際の社会問題、労働者階級の台頭という新しい状況に対応したものである。そのための社会政策的な空間装置として公園が位置付けられていたことに、当時の公園論の新鮮さがあるといえよう。

しかし、公園論で言明された利用者像の中で、野宿者即ち当時の言葉で言えば「無宿者」はどのように考えられ、取り扱われていたのだろうか。関、大屋、椎原、大林による「無宿者」への言及は管見ではない。そこで、当時の社会問題を研究し数々の提言を行っていた代表的機関である大阪市社会部の報告を検討する。次節では、上述した公園論を社会問題上の文脈から捉え直す上で有効だと思われる大阪市社会部報告「余暇生活の研究」をまず分析し、この問題を考えてみる。

3. 大阪市社会部の公園論及び「無宿者」認識

本節では、当時労働問題調査で活躍した大阪市社会部による「余暇生活の研究」²⁰⁾を取り上げ、そこで想定された公園像、利用者像を明らかにするとともに、同報告「公園内における無宿者調査」の中から社会部の「無宿者」認識を明らかにし、社会部公園論の公園像や利用者像を支える枠組みを浮かび上がらせる。

(1) 社会部報告「余暇生活の研究」における教化のため空間

1921年、文部省が全国的な「民衆娯楽調査」を実施し、その翌々年市社会部が「余暇生活の研究」(以下「研究」)を発行した。「研究」は、工場の機械化や労働時間の短縮に伴い、増大した労働従事以外の時間「余暇時間」と定義し、文化施設として公園を挙げる。複雑化し人間に圧迫と疲労を与える都市に対し、公園を「砂漠に於ける緑地」、都会人の神経のための「鎮静剤」に喩え、それ故「公園が骨董品として鑑賞された時代は最早過ぎ去って寔に疲れ多き現代人の生活の為の休養娯楽施設」²¹⁾「公園は民衆の公園であって(中略)満足な住居を持たず公園を自己の庭園として唯一の慰安休養の地と考へて居るやうな人々の趣味要求を標準」とし「彼等の最も利用し易かるべき無産者階級の公園、民衆の公園たらしむること」²²⁾と主張する。社会部の公園論も、先に見た大屋らの公園論と共通した文言を用いて、社会政策的な空間装置として公園を位置づけていることがわかる。

さて、「研究」は文化的施設として他に運動場、動物園、植物園、博物館、市民館、公会堂、図書館などを挙げている。市民館の項で、「余暇を飲酒、賭博、放蕩に其他低級な娯楽に費やし彼等(民衆:筆者)の品性を墮落せしめ向上発展の途を自ら塞すの嫌あるを導いてその余暇を有意義に利用せしむる点に於いて市民館責務の重大なるものがある」²³⁾とする。つまり、「研究」の目的は「民衆」が余暇時間を濫用することなく善用し有効健康にすべく指導することであった。

「研究」は、民衆がその中で教化/善導されるべき空間として公園や他の施設を捉えている。市社会部のいう「民衆/無産者階級」は、余暇時間には千日前や道頓堀などの「悪所」ではなく、自発的に緑のあふれた「公園」に行き、向上心を持つべき存在として規定されていた²⁴⁾。「良民」創出のための身体訓育装置としての空間像が、社会部の公園論の特徴であったことがわかる。

では同じ社会部は「無宿者」をどう捉えていたのだろうか。市

社会部の最初の「無宿者」調査研究である「公園内に於ける無宿者調査」²⁵⁾（以下「無宿者調査」）を取り上げる。「無宿者調査」には、市社会部の「無宿者」認識が窺えるだろう。

（2）社会部報告「公園内に於ける無宿者調査」の「無宿者」認識

「無宿者調査」は1920年末より深刻化した第一次大戦後の反動不況による「事業界の不振」「国際貿易の衰退による労働者の過剰」「工場鉱山の閉鎖」「小会社銀行の破綻休止」の結果、多くの労働者や給料生活者が街頭に迫われ中之島公園や天王寺公園に「無宿者」として多数存在することを冒頭で述べる。（表1）

「無宿者調査」は「無宿者」を「無業者（「不具者病者乞食その他無能力者」）／失業者／有業者」に分類する（分析対象は1925年10月の調査）。労働／社会問題として捉えられてしかるべき「真の失業者」を絞り込むためである。「真の失業者」は労働の意思とそれに耐えられる体力、そして「職業を求めて与えられない」ものと設定し、故に「乞食浮浪者の徒」は失業者ではないとみなす。

「無宿者」の内「失業者である」と答えた人に失業の原因を問い、「仕事なきため」という回答が第1位になると「仕事無きため事業縮小のため或いは病気のため」というが如きは一種の口実でその実労働意志を欠き或いは労働能力をもっていないものが少なくないことは調査の方法上容易に想像し得られる（中略）果たして総数の幾割が真の失業者であるかは疑問である」²⁶⁾との解釈を施す。

一方、1924年の東京市統計課による「浮浪者の浮浪原因」の調査結果「個人的関係（病弱、飲酒放蕩など）18.1%」「社会的関係（仕事なきため・上京後就職の機会を得ぬため・失業後就職の機会を得ぬため）64.1%」「家庭的関係4.4%（家族の死・その他の原因により生計困難となったため・家庭不和）」「自然的関係5.4%」「不明8.1%」を援用し²⁷⁾、「社会的欠陥として見れば何れも同じ意義をもっているから一は救済すべき他は捨ててもよいというわけには行かぬ」²⁸⁾と唱え、「無宿者」が社会構造から生み出されることを認めざるを得ないという認識を示す。

結語では「無宿者」対策として、第一に「浮浪者乃至無宿者」禁止及救済する法律規定の不備、第二に社会政策的設備による救済及び「善良なる市民」にする教化施策の必要、第三に現実の救済策としての①大阪市労働共済会各種施設利用の促進②1925年から進めている市の失業救済土木事業による失業者救済③既存社会施設利用促進による「定住の習性」の涵養を提言している。

そして「甚だ姑息な方法」と認めつつ「浮浪者乃至無宿者救済のための特別の立法又は社会的施設の実現を見ない時期においてはかかる消極的微温的手段によって無宿者の増加を防ぎ社会的弊害を可及的に少なくするしか他にとるべき途はない」²⁹⁾と弁明し、以下の2点を消極的提案として挙げる。(1)警察当局の取締りの強化、公園その他における設備への改造、巡視の設置による無宿者の来集防止、(2)「病者不具者及老幼者」への現在の救護又は救助施設による対応。

以上、社会部は「無宿者」が失業という社会構造から生み出されることを認めざるを得ないという認識を示しつつも、①犯罪予防・治安対策の対象³⁰⁾、②救済／教化対象³¹⁾さらに、③社会的弊害流布の原因³²⁾という「無宿者」認識を一貫して提示する。

「無宿者調査」の結語が「無宿者」対策として「善良なる市民」への教化施策の必要を上げていることに注意すべきである。「無宿者」となった経緯、一人一人の事情や状況はどうであれ、少数であろうとなかろうと、怠惰で働く意志のない「乞食浮浪者」「失業者」が公園内に存在することを示すことによって、「無宿者」「無宿」そのものを治安・取締・救済の観点から有微化する。つまり、「研究」によって教化のための空間として位置づけられた公園に存在する「無宿者」は、この有微化によってさらなる教化を受けるべき存在として認識されていた。それ故、教化のための

空間に「教化し得ない」存在を提示することにより、健康で明るい公園と「善良なる市民」を是とする公園像を反映したという意味で、「無宿者調査」は「研究」の公園論における身体訓育装置としての公園像を補完したといえる³³⁾。社会部の公園論には、利用者像である「庶民／無産階級」からの「無宿者」の排除はあらかじめ内在化されていたのである。

では、「無宿者」に対してなんらの措置も講じられなかったのだろうか。そうではない。「無宿者」を収容保護する市の施設は保護所として作られたが、記録では付近の空き地に野宿者があふれている状態が記述されており、保護所等の社会施策も限界を有していた³⁴⁾。そうなると、都市オープンスペースに暮らさざるを得ない「無宿者」への管理・取締は、当時都市オープンスペースの一般的な管理・取締を担当する警察が行っていた。

例えば、1925年10月3日の大阪府警察部によって被検束者514名中325名は警察犯処罰令第1条第3号及第2条第3号浮浪罪「一定の住居又は生業亡くして諸方を徘徊するもの（中略）乞食を成し又なさしめたるものは（中略）同じく三十日未満の拘留又は二十日未満の科料に処する」によって検束されている³⁵⁾。しかし、あまりにも多い無宿者の存在は、「警察では取締り上、浮浪者として樹間やベンチの陰から目を光らせたものの、却って彼等の境遇は余りに分かりすぎているのでどう手を下していいかわざるをえなかった」³⁶⁾と記されているように、警察の中においてすら取締の無意味さというジレンマが感じられていた。

4.まとめ

大屋、椎原、関、大林そして市社会部が展開した公園論における公園像・利用者像から明らかになったことを次に記す。当時の大屋らが展開した公園論は、①公園をそれまでの「装飾／骨董品」といった姿ではなく、都市環境の悪化に対して公園に衛生・保健・休養・教化という新しい機能を付加し、②利用者像として「庶民／労働者階級／無産者階級」をその筆頭に挙げ、人口稠密、工場集中による煤煙などの問題や、労働者階級の台頭に社会政策的な空間装置としての位置づけを持つものであった。また、その理念は実際の公園計画として実体化されつつあった。

ではその利用者像の中に、社会構造から生み出された「無宿者」はどのように位置付けられていたのか。大屋らの公園論では、利用者像として「庶民／労働者階級／無産者階級」を挙げるものの、「無宿者」に対する言及はない。社会部の公園論においても、利用者像として言明されているのは大屋らと同様に「庶民／無産者階級」であった。しかし、社会部の公園論の構造分析から、①「民衆／無産階級」とは教化・善導されうる存在であり、その教化のための空間装置として公園が提示されていたこと、②さらなる教化の対象としての「無宿者」は「庶民／無産階級」という利用者像から内在的に排除される位置付け方がなされていたことが明らかになった。社会部の公園論は、社会問題の文脈上、大屋らが語ることのなかった公園内における「無宿者」の存在を問題視する公園管理施策論の一端を担っていたといえる。

表－1 公園内の「無宿者」数（「無宿者調査」より作成）

対象	1925/8/30	1925/9/1	1925/10/1	1926/7/21	1928/7/18
中之島公園	582人	392人	296人	約300人	390人
天王寺公園	463	170	225	350	368
大手前公園	0	-	-	-	-
桜宮公園	7	-	-	-	-
木津公園	1	-	-	-	-
築港公園	7	-	-	-	-
西野田公園	2	-	-	-	-
扇町公園	31	-	3	109	35
北野公園	2	-	-	-	-
九条公園	43	-	-	-	-
計	1138	562	524	約759	793
備考	社会部（午前2時～）	公園課（午前1～2時）	「無宿者調査」	府刑部課（午前1～）	社会部

しかし、度重なる恐慌や失業という社会構造から吐き出された「無宿者」に対し、社会事業がその任を果たせない状況の中では、公園は「無宿者」のとりあえずの居場所として客観的にも機能せざるを得ない状況にあった。「無宿者」に対する社会施策も限界を有しており、また警察による公園からの「無宿者」の排除という施策では対応しきれないのが現状だったのである。

最後に、今回の作業を現代に引きつけて考察すると、学問的倫理性及び研究方法論の観点からも避けて通ることのできない課題として、以下の2点が確認できる。①「誰もが自由に出入りでき利用できる」という都市公園論において、恣意的に野宿者を排除

することは、論としての整合性や説得力を有さなくなる。②「公園本来のあり方に反する」とする野宿者排除の論理は、公園の内部しか考えていないことに由来する。都市社会問題としての視点がなければ、公園内の野宿者に対する施策は公園を閉じるか（「来集防止」装置の設置もこれに含まれるだろう）、警察導入による強制排除しか選択肢がなくなる³⁷⁾。行政が「地元住民の苦情」等を野宿者排除の理由とすることも、公園管理行政の有するジレンマの解消にはなっていない³⁸⁾。だからこそ、社会福祉などの総合的な取り組み・検討への整合性が、現在、公園論や公園管理を再検討する際に必要とされるのである。

注	る都市公園の近代化と学校教育：ランドスケープ研究 59(5)：P29-32を参照	に公園の利用形態・利用者像の直接的な言及はないこと、そして「民衆／無産階級」「善良なる市民」の具体的な姿の提示や文言は両報告のどこにもないということである。治安・取締、救済・改善の対象として腑分けされ、具体的にその身体が曝されるのは常に「無宿者」であり、目指すべき「善良なる市民」「民衆／無産階級」は有徴化された「無宿者」以外の存在としてのみ存立することになる。つまり「善良なる市民」は「無宿者」という参照項によって照射されてはじめて存立する概念上の存在として捉えられる。
1) 1925年の市域拡張以前の旧市域は1925年から1940年まで133万人から154万人へと16%の増加率、編入された新市域は78万人が170万人と2.2倍の激増であった。	20) 大阪市社会部調査課(1923)：余暇生活の研究：「生活古典叢書8」光生館所収	34) 公園その他における「無宿者」収容保護を目的に1929年に定員180人の今宮保護所が建設された：「設立の当初は天王寺公園及びその附近の浮浪者を収容して尚ほ余地があったが、その後不景気の深刻化に伴う失業者の増加に依って次第にその数を増し、定数は疾く突破して附近の空き地に浮浪者が溢れている状態である」：大阪市社会部(1931)：今宮保護所の記録：社会部報告第139号：P14
2) 1927年大阪都市協会は煤煙防止調査委員会(会長関一)を発足させ、煤煙防止運動を展開した。	21) 同上書P161	35) 前掲「公園内に於ける無宿者調査」：P15
3) 1925年の失業者数は18190人(失業率3.36%)、30年は30190人(5.44%)：大阪市社会部労働課(1932)：失業者数の推定に就いて：社会部報告第154号：P7	22) 同上書P163	36) 木村浩(1926)：失業救済土木事業の巻：大大阪第2号第4巻：P110
4) 高橋理喜男(1963)：大阪市における小公園の源流：造園雑誌26(4)、天王寺公園柵外地に関する研究：造園雑誌27(2)を参照。進士・吉田(1989)：震災復興公園の生活史的研究：造園雑誌52(3)は「浮浪者問題」と公園管理問題に触れている。	23) 同上書P166	37) 公園を有料化し柵で囲むことの影響については永橋・土肥(1996)：大阪市天王寺公園の管理の変遷と有料化が及ぼした野宿者排除の影響に関する研究：ランドスケープ研究59(5)：P213-216参照
5) 関一(1928)：都市の緑化：大大阪第4巻第1号：P5-6	24) 実際にはこのような規定を内面化する人間はいない。いない人間を創出する空間装置を想定するところに社会部公園論の権力性を看取しうる。	38) 行政のジレンマについては吉田直樹(1990)：現場からみた公園管理の諸問題：1990年度大阪市建設局業務論文報告集：P1049-1053、及び「都市公園」No.135(1996.11)掲載の「公園管理をめぐってー公園のホームレスー」P52-61参照
6) 7) 同上書P7	25) 大阪市社会部調査課(1926)：公園内に於ける無宿者調査：労働調査報告第50号	
8) 関一(1931)：都市の緑化：都市公論第14巻第8号：P6	26) 同上書P34	
9) 大屋霊城(1927)：公園設定の急務：都市公論第3巻1号：P57	27) 同上書P61	
10) 椎原兵市(1926)：公園の使命と趨勢：大大阪第2巻第2号：P77	28) 同上書P62	
11) 同上書P78	29) 同上書P66	
12) 13) 大林宗嗣(1923)：都市社会政策としての公園問題：大原社会問題研究所パンフレットNo10：P9	30) 「経済界の沈滞事業会の不振など財界不況の原因が停止せぬ限り益々高められるべきであり斯くて不良青少年浮浪者又は失業者などの無宿者が徘徊することとなり押売強請誘拐或は窃盗などの犯罪が随所に醸さることとなった」：同上書：P18	
14) 同上書P54	31) 「要するに無宿者問題は病者不具者精神異常者などの無能力者を含む点においてこれ等に対する養育保護に関する救済問題に関連し不良青少年や下層労働者階級の失業者及び浮浪者を含む点に於いて不良青少年問題及び浮浪者問題を総括する社会問題と見られる」：同上書：P4	
15) 同上書P60	32) 「浮浪者の社会に対する害悪は概して直接に現れないが為に、動もすれば看過され易いが、それが多数市中を彷徨することは、社会の風教を紊し労働者の勤勉の習慣を害ふに至る憂が甚だ多い」大阪市社会部調査課(1930)：本市に於ける社会病：社会部報告121号：P18	
16) 大屋前掲書P55	33) ここでおきえておきたいのは「無宿者調査」	
17) 椎原前掲書P78		
18) 椎原兵市(1928)：我が大大阪の計画成る：大大阪第4巻8号：P26		
19) 例えば、野嶋政和(1996)：明治末期におけ		

Summary : From the second half of 1910s to the first half of 1930s, in Osaka City where there were social problems caused by excess population, depression and air pollution, public park construction projects were developed on the establishment of City Planning Act . On the same time, the authorities in the Osaka City Government argued about ideas of public parks. I structurally analyzed these discourses in social contexts, so I could conclude as follows : 1. They designated labor class as main users of public park, and this idea derived from their new concepts on park function, not as ornaments but as public health and enlightenment. 2. So, they considered public parks as spatial apparatus. 3. But, these discourses didn't suppose the existence homeless people as users. 4. In spite of these discourses, public parks had to function as refuges for homeless people who were produced by social structures.